

編者あとがき

グローバリゼーションの波が、私たちの日常生活にまで大きな影響を与えるようになった状況に直面して、私たちは、この新しい現象のもつ意味を明らかにしようと共同研究を重ねてきました。

本書の出発点となったのは、二〇〇六年の夏に三重県で開いた合宿セミナーでした。本書の序章に書かれているように、一般的にグローバリゼーションは、「外からの」とか「上からの」とか、あるいは「下からの」グローバリゼーションという視点から議論がされているのですが、そのような視点からだけでは捉えきれないような、もっと重要な意味合いがあるのではないか、という問題提起があって、議論が沸騰しました。その場を出されて、たちまちメンバーの間で共有されるようになったのが「内からのグローバリゼーション」という新しい視点でした。こうして、国であれ、地域であれ、組織であれ、個人であれ、それぞれが主体性を発揮して生きる「自己発現」という言葉を共通のキーワードにして、「内からのグローバリゼーション」という視点から現代社会の実相に迫り、グローバリゼーションがもたらしてきた諸問題を解決する方向を見出すために、新しい共同研究が始まりました。

あれから三年余り。結論めいたものを出すにはなお時間が必要ですが、この段階でともかくもこれまでの研究の集約点をまとめて、世に問うてみようということになり、今回の刊行にこぎつけました。

編集にあたってとくに心がけたことが二つあります。

第一に、全体を、「いまの世界で私たちはどう生きているのか」、「先人たちの伝統的な文化・文明から何を学ぶか」、「これから文化・文明をどう再構築するか」、という三部構成にしました。グローバリゼーションという現象は、いわば、「現在・過去・未来」という歴史的な視点から捉えることが重要だと考えたからです。各部の構成にややアンバランスが残ったことは否めませんが、それも、「今ここに」と「今につながる明日」を重視したことからきたものです。

第二に、執筆者の個性を生かすことを重視しました。本書では、文化・経済・政治など幅広い専門分野からなる各執筆者が、問題意識を共有しながらも、それぞれの専門領域に独自の切り口で取り組んで独創性ある分析を展開しています。そこで、日本語表現も含めて、執筆者の個性をできるだけ生かすようにしました。多くの読者に読んでいただけるように平易な表現を心がけたのですが、執筆者によって多少文体に違いがあるのは、そのような編集上の意図によるものです。

本書は、GN21の理事でもある各執筆者の熱意と努力の結晶です。奴田原睦明さんと大久保史郎さんには、諸般の事情から執筆いただけなかったのですが、お二人には研究会に参加して議論の方向付けに尽力いただいたので、実質的には本書の共著者であることを申し添えておきたいと思えます。

最後になりましたが、企画・編集段階でのアドバイスから校正にいたるまで大変お世話になった黒川美富子代表ほか、文理閣の皆様がこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

二〇一〇年三月

GN21(グローバルネットワーク 21) 代表 片岡 幸彦